

継続するあそびの計画と実践

保育日誌から

谷口節子



子どもたちの毎日のあそびを見ていると、教師である私たちが全く声をかける余地のないほど、子どもたちだけで楽しくおもしろくはずんで、それが何日も何日もつづいていることがあります。一方、こちらでこういう経験をさせたい、こういうことを身につけてもらいたいという意図をもって子どもたちのあそびにのぞみ、方向を与えていく場合もあります。そしていろいろなあそびを通して彼らは、集団の中でよりよく生活してゆく方法やルールを身につけてゆくのです。

私が今受け持っていますのは、四才児四十名のクラスで、明るく元気はいいのですが、とてもにぎやかでクラス全体で一つの方向にむけるには相当骨の折れる毎日です。こういう中ですので、この「継続するあそび……」というタイトルとはちょっと縁遠いまとまりのないものになりましたが、十一月の一時期、子どもたちとのあそびの一コマを、保育日誌の中からひろってつづってみました。

十月には、時期的にもおまつりなどがあり、お店屋を身近に見、また接したことで、私は継続してあそぶ材料に「おみせやさんごっこ」をとり上げました。まずは定石通り、あめや石鹸の箱その他を使ったおもちゃの自由製作、つづいてお店屋の準備、そして店びらきと、十日間位の予定で

と考えておりました。ところが実際には、すきな材料ですきなおもちゃを作ること、また作ったものであそぶことにより興味が集出して（五日間ほど続き、汽車、自動車から望遠鏡テレビ、アパート、ロボットといろいろなものができました）肝心のお店屋さんごっここの段になると、お店をひらくまでには相当の助言とリードが必要でしたし、その後もごっこあそびとしてクラス全体で興味がのつてはズんだのは正味二日、わっと集った興味は、またあつと言う間にせんこ花火のように消えてしまいました。もつともその中では、「いらっしやい、いらっしやい」「これくださいな、いくら？」「はいおつり」などのことを楽しんで、時々役目を交代する話し合いも各自できていましたし、限られた友だち以外とあまりお話しなかった子が、元気に「これくださいな」と言っているのにも出合いました。

この結果の不満は、或いは私がごっこあそびとして頭にえがいていたものが高度すぎた為起こったのかも知れませんが、また計画の進め方にもう少し適当な方法があったかもしれないとも反省しました。けれども一応この経験から、ある程度あそびとして継続、発展させたいと考える場合は、対象がより未分化な四才児である場合は特に、その内容が子どもたちの生活と結びついたもの、子どもたちの気持からより上

ったものでなければならぬということが言えると思いましたが。

そこで十一月には、「元気のいい子どもたちの自由あそびの中で時々見かける「おすもう」をとり上げ、ちょうど九州場所も始まっているところなので、これを少し継続的に、クラス全体のあそびに発展させてみたいと考えました。

まず計画ですが、先にも言ったように、あくまでも子どもたちが無理なく、よろこんで参加しながら、しらすしらすのうちには何かを身につけてゆけるということが大事ですので、あまり形にこだわらず、大体の目標と極く大ざっぱな展開の筋道だけを頭に入れて出発しました。

（目標）

- さむくても、ちぢこまらずに元気よくあそぶこと。
- ルールを守ってあそぶこと。
- いつもはあまりあそばない人とも、誰とでもあそぶこと。
- 負けることをおそれず、力一杯ぶつかること。

（導入）

○先月からうたっている「かぶとむし」のうたに合わせて時々むしのおすもうをしてあそびました。

○二、三人で自由にとっ組んでころげまわっているところに出会うと、そばで応援したり、土俵の円をきちんと描いて

あげたりして、それとなく加わりました。

○先生がおすもうに入ったと見ると、次々に「いれて」と参加してきた子どもたちを、東西に順序よく並んで待つように助言しました。

第一日目はこのような具合ではじまりました。見ていますと、一度とり終った子が並んで待っている友だちの後にゆかずにまたすぐとったり、勝った子は次の子とかわらずに続けてとったり、あぐくの果ては三組一しょに一つの土俵でおすもうをはじめると。そこで私が「呼び出し」の役を買って出ることになりました。「ヒガシー、あきひこやまー、ニーシー、のぶかずやまー」よばれた人は、何ともてれくさそうに、でも少し得意そうにむっくりと円の内側に入り、はじめの合図を待ちました。はじめの合図は「ハッケヨーイ、ノコッタ」（本当の意味とは違ってはいますが、これがヨーイドンのつもりなのです）なかなかいい勝負、いつも「ヒコーキの紙ちようだい」とヒコーキとばしが大好きで、あまり活発なあそびをしないのぶかずちゃんにしては、まるでみちがえるようなフアイトです。一方のあきひこちゃんも日頃はやさしく、黒板によく鉄人二八号の絵を描いていたのしんでいる小柄な子なのですが、今は顔を真っ赤にして口をへの字に曲げて、より切られまいとふんばっています。次はたつおやま

とゆたかやま。これはあつと言う間の勝負で、気は小さいけれども太って体力のあるたつおやまの勝ち、体は小さいけれども勝ち気なゆたかやまはちょっとくやしそう。こうして三、四組とっているうちに、女の子の観衆がぐるりとまわりをとり囲み、それぞれいきのおすもうさんの応援をはじめました。となりのクラスの体の大きい元気な男の子が五、六人「入れて」とやって来ました。「もり（もりの組）」はもり、ほしはほしで並ぼうよ」と誰かが言い出して、はからずもクラス対抗のおすもう大会となり、一時間余りにぎやかにたのしくあそびました。一日目はこうして終りました。

第二日目。子どもたちの顔もだいたいそろい、あちこちで朝のあそびのはじまる頃、「先生、またおすもうしようよ」と数人の男の子にもちかけられ日当りのよい庭に出ました。砂のやわらかいところを選んで円を描いてあげると、中のしきりの線とひかえの人のいる場所は自分たちで描きました。よび出しと判定は例によって私がひきうけて、はじめました。今日は男の子ばかりでなく女の子にも元気があそびに参加させたい、という私の気持がありましたので、三組ほどとってから、まわりでみていた女の子をとび入りでよび出してました。「ヒガシー、けいこやま、ニーシー、みつえやま」よび出された二人は突然でおどろき、はじめは少しお

どおどしていました。女の子同志なので安心したのか、てれくさそうに笑いながら円の中に入りました。幼稚園ではあまり口をきかないけれど、うちではお兄ちゃんがいてとても元気、というみつえちゃんと、こちらもおとなしい方だけれども四人兄弟の三番目というけいちゃんも両方ともなかなか元気、力が入ったおしずもうとなり、まわりの人たちは大よろこびで拍手を送りました。次々と男子にまじって女子が入り、男の子と当るようになって平気で、結構ファイトをもやしかなりおもしろい勝負となりました。男女入れまじって興がのって来たのを潮に、それまで私一人でやっていたよび出し、判定の役を、女の子二、三人にバトンタッチしました。こうして殆んどクラス全員でおすもうさんや見物人になってしばらくあそびましたが、男の子の中でもっとも体は大きく腕力も強い子で、どうしても「いやだよ」といっておすもうごっこには入ってこない子が一人ありました。

この日のおべんどうの前、誰からとなく、今日のおすもうごっこについて話し合いがはじまりました。「ぼく五回勝ちちゃった」「ともちゃん女の子なのになごっこつよいな」

「やっちゃんつよいのはお兄ちゃんと毎日れんしゅうしているからだよ」「ぼくうちではお父さんにも勝ちちゃうんだよ」

「それはお父さんがわざと負けてくれるんだもん」「ほんと

のおすもうは軍配というものもってるんだよ」「ぼくこんどからたかしやまじゃなくて、北葉山にしよう」と」などなど話はつきませんでした。

次の日は雨。せっかく北葉山や元気な子どもたちがたのしみにしていただいたのに。そこで今日は予め用意しておいた紙のおすもうさんを作ることにしました。印刷したおすもうさんを一人ずつ、作りたい人にだけわたし、作り方は簡単に説明して各自で作るようにしました。またボール箱に円く土俵を描いた紙をはり土俵も四つほどでき上りました。軍配をもった行司さんのお人形を自分で作った子もいました。でき上がったものですぐあそびたいのが子どもたち、ボール箱の土俵の糊のかわくのをましかねておすもうさんを二人組ませて中央におき、両方でトントンたたきはじめました。一ヶ所では満員になるので、四つ、はなれたテーブルの上におきましたら、子どもたちはこんなふうに話していました。「ぼく第一チャンネルの土俵でやるんだ」「ぼく第四チャンネルにこう」「こっちの第六チャンネルは満員だぞ」。なるほど、テレビの中継をこんなふうに感じているのかとちょっとたのしくなりました。

四日目。朝くるとすぐひき出しから紙のおすもうさんを取り出しあそびはじめました。そのうち一人が「すぐころんで

ぼくのは負けてばかりだ。もっとつよいのつくりたいな」と言ってきた。それで少し厚目の画用紙を与え、形は自由に自分で描き、立つようにする部分だけ私が力を貸してあげつくることになりました。たちまち十人ほど作りたい人が現われ、「ぼくのこんなになっちゃった」「背の高いのがつよいんだよ」「ふとっちょにしちゃえ」など友だちのと比べたり話したりしながら、いっしょうけんめいつくりました。

こうして紙のおすもうさんは、前日とこの日と二日間お部屋で子どもたちと一しょに活躍しました。

翌日はもう私の手をわずらわすことなく、お庭でおすもう大会がはじまっています。今日は、勝負には女の子はまだらず、専ら行司さん、土俵をはいてきれいにする人、そして今日は勝った人には、何やらはっぱや石ころの「懸賞」をわたしているようです。そのけんしょうをお庭を走りまわって集めてくるのも女の人の仕事のようです。その上いよいよ本格的になり、一度勝敗がきまると、行司さんやまわりの人が「こんどはビデオテープ」と言います。そうするとその二人がもう一度同じ勝負をします。前と同じようにできる組もあればこんどこそとばかり改めて頑張っちゃう組もありました。「分解写真」「スローモーションで」ということばもとび出し子どもたちの真剣な様子が、見ていてとても楽しく、

私は笑いをこらえるのに苦労しました。このように一しょに楽しんでる時、一つのことには気がつきませんでした。それは並んで自分の番を待っている子が、相手側の順番を目で数えて、ちよほど自分の当る相手が強くてかなわないと思われる人だと、それとなく一人後に退ってあたる相手をかえる人がいるのです。私はちよっとおどろき、これは子どもとしてはかなり発達した知恵だと思いました。またそれと同時にそのまま伸ばしては困ることもなる芽の芽ばえだと思いました。そういう時にこそ正當にファイトをもやしてがんばる子であってほしいと願うところですので、見のがせず、「順番をまちがえないようにね、あなたは〇〇さんの次だったわね」とそれとなく言いましたが、そればかりか、当るとどうしても強くてかなわない人がいると「ぼくこっちへかーわろ」とその人の側へかわる子があらわれたのです。やっぱりクラスの中では知恵の進んだ方のしげるくんとひろむくんでした。「どうして？」ときいてみると案の定「だってのぼるくんつよいんだもの」という答え。「のぼるくんつよいけどぼくだってつよいじゃない。うんと力を入れてがんばれば勝てるかもしれないわよ。つよい人とするんだんたんつよくなるのよ」と話す、しぶしぶもとに帰りましたが、こうした一見気のつかないようなあそびの中でこの要領のよさ、ずるさという

ようなよくない芽もまたよい芽も、芽生え育ってゆくのだな、注意深く見守ってあげなければいけないなど痛感しました。こうしてこの日はいろいろおもしろいことや、考えさせられることがありました。

その次の日はおゆうぎ、みんなでおゆうぎ室にゆき、ピアノに合わせて仲よしおすもうをしました。二人ずつ「金太郎」の曲に合わせて土俵（みんなで作っている円陣）に歩いて入り向かい合い、曲の後半及び後奏で自由におすもう、曲の終りで勝負、円陣の人は拍手で応援。全員参加でにぎやかにあそびました。その日のおかえりの前に、「もん太の大すもう紙」という芝居をしました。よび出しやらおすもうの場面などが出て来て大よろこび、とても真剣に見ていました。

その中で、とても強そうなたらとあつたブタが、急におなかがいいたいと言って逃げ出すところがありました。そこで見終った後で「ブタさんはほんとにおなかがいいたかったのかしらね」ともちかけると「うそだよ。トラに負けるのはいやだからそういったのだよ」「ブタはよわ虫だよ」などの反応がありました。私は「そうらしいわね」とだけ言って黙っていますと「ぼくも、そういうの一回だけあったけど、またぼくはすぐのぼるくんとやったもんね。そしたらぼくが勝ったんだよ」といったのはひろむくんでした。何と正直でかわい

子だろうとうれしくなりました。こちらが必要以上に言わなくても子どもたちの方ではちゃんと感じているのだなと思えました。

私の最初の計画は大体このあたりまででした。特別にしめくりもなく、子どもたちはこの次の日も二、三日してからもまた思い出したように集っては、庭の日だまりでおすもうをしています。

こうして予定では一週間、ある日は一日中、ある日は朝のひと時を、またある時はみんな一しょに、ある時は何人かのグループで、もちろん他のいろいろなあそびや仕事と並行させながらやって来ました。そして、思いもよらない人の思いもよらないファイト、真剣なまなざし、また力は強くてきかん坊なのにいざというとなかなかとけ込んでゆけない子、負けても負けても平然と手につばしてかかってゆく頼もしい子たちを知ることができました。また、思い切り力を出して、友だちと体をぶっつけ合っただけが多くなってから、以前より、ささいなことから起こるけんかが少なくなったように思われ、思わぬところにも成果があったとうれしく思った次第です。